

強者の戦略

こんにちは。日本史の岡上です。だんだん気温も上がってきて夏の訪れを感じますね。

「東大日本史のみかた」も5年目に入りました。今年も最新の東大の入試問題を題材にお話をしていきたいと思っています。

さて、みなさん、1週間ほど時間がありました。どのような解答が仕上がったでしょうか？今回取り上げた東大日本史の第1問は古代からの出題で「古代国家成立の過程におけるワカタケル大王時代の意味」を考えさせる問題でした。5世紀の政治と外交については過去にも出題がありましたね。

1994年 [1] 倭の五王と遣隋使との外交姿勢の変化

とはいえ、前回は1994年の出題ですので、久しぶりの出題範囲ともいえるでしょう。それでは解説を始めていきましょう。

<古代国家成立の過程における

ワカタケル大王時代の意味>

設問

5世紀後半のワカタケル大王の時代は、古代国家成立の過程でどのような意味を持っていたか。宋の皇帝に官職を求める国際的な立場と「治天下大王」という国内での称号の相違に留意しながら、6行以内で説明しなさい。

設問で問われているのは「5世紀後半のワカタケル大王の時代」が「古代国家成立の過程」に「どのような意味を持っていたか」です。そして、「宋の皇帝に官職を求める国際的な立場」と「治天下大王」という国内での称号の「相違に留意しながら」という条件にも注意が必要です。

まずは、資料文を一つずつ読みながら、じっくりと考えていきましょう。

(1) 『宋書』には、478年に倭王武が宋に遣使し、周辺国を征服したことを述べ、「使持節都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事安東大將軍倭王」に任じられたと記す。このうち推古朝の遣隋使まで中国への遣使は見られない。

資料文(1)には設問にあった「宋の皇帝に官職を求める国際的な立場」についての記述があります。有名な「倭王武の上表文」の記述ですので、知っている人も多かったと思いますが、もう一度確認しておきましょう。

478年に倭王武(=雄略天皇)は宋の順帝に対し朝貢を行いました。その際に「周辺国」(西の衆夷、東の毛人、海北=朝鮮など)を征服した旨を伝え、特に**朝鮮半島南部における軍事支配権を主張**しました。その結果、宋より「使持節都督倭・新羅・任

強者の戦略

那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事安東大將軍倭王」という称号を与えられました(冊封を受けた)。つまり、この時点における倭の「宋の皇帝に官職を求める国際的な立場」とは、「中国を中心とした秩序のなかで朝鮮半島南部の軍事支配権を確保しようとしていた」立場、とまとめることができます。

さて、資料文(1)には続いて「こののち推古朝の遣隋使まで中国への遣使は見られない」という一文がみられますが、これはどういうことでしょうか。中国への遣使が中国を中心とした秩序へ包摂される行為であると考えれば、「倭王武の上表文」以降の倭は中国を中心とした秩序へ包摂されなかった(もしくは包摂される必要がなかった)ということになります。つまり、**中国へのスタンスにおいて何らかの変化があった**と考えられるわけです。

続いて資料文(2)を読んでいきましょう。

(2) 埼玉県の稲荷山古墳から出土した鉄剣の銘文には、オワケの臣が先祖以来大王に奉仕し、ワカタケル大王が「天下を治める」のをたすけたと記す。熊本県の江田船山古墳出土の鉄刀銘にも「治天下ワカタケル大王」が見える。前者の銘文は471年に記されたとする説が有力である。

これまた有名な「ワカタケル大王」の鉄剣銘・鉄刀銘の記述ですね。この資料文(2)は国内のことですので、「治天下大王」という国内での称号」に関するものと考えます。

さて、埼玉県稲荷山古墳と熊本県江田船山古墳古墳から出土した鉄剣・鉄刀の銘文には「ワカタケル大王」の文字が刻まれており、また稲荷山古墳出土鉄剣の銘文は「471年に記されたとする説が有力」とありますので、資料文(1)でみた478年に倭王武が宋に遣使するより以前の段階で、**倭の国内では「大王」の称号が成立していた**ことがわかります。また

埼玉県(=関東)と熊本県(=九州)という位置関係からは、**当時の「ワカタケル大王」の影響力が関東～九州という範囲に広がっていたこと**をうかがい知ることができます。

さらに資料文(2)には、「オワケの臣が先祖以来大王に奉仕」し、さらに「ワカタケル大王が「天下を治める」のをたすけた」とあり、「オワケの臣」という豪族が大王に奉仕していたことも読み取れます。

そして何よりも注目しておきたいのは**ワカタケル大王が「治天下」、つまり「天下を治める」ワカタケル大王と記述されていること**ですね。ここではワカタケル大王の支配領域を「天下」と称しているわけです。しかし、中国皇帝の支配する領域を「天下」(=世界)と称するのが一般的ですので、**ワカタケル大王は中国皇帝とは異なる独自の立場から、「天下」(この場合の「天下」はワカタケル大王の支配領域=関東～九州?)の支配者と主張している**ことがわかります。

続いて資料文(3)です。

(3) 『日本書紀』には、雄略天皇を「おおはつせ大泊瀬幼武天皇」と記している。「記紀」は、雄略天皇をきわめて残忍な人物として描き、中央の葛城氏や地方の吉備氏を攻略した伝承を記している。

資料文(3)からは「雄略天皇=ワカタケル」であるという、これまた受験常識的な内容を読み取ることができます。そして、ここではその雄略天皇が「中央の葛城氏や地方の吉備氏を攻略」、つまり中央・地方を問わず広く豪族を従えていった姿が描かれています(これは資料文(1)のところでも触れた、西の衆夷、東の毛人などの征服といった事例とも対応しますね)。

強者の戦略

最後に資料文(4)です。

(4) 475年に百済は高句麗に攻められ、王が戦死していったん滅び、そののち都を南に移した。この戦乱で多くの王族とともに百済の人々が倭に渡来した。さまざまな技術が渡来人によって伝えられ、ヤマト政権は彼らを部に組織した。

資料文(4)の前半では、475年のこととして百済が高句麗に攻められ、都を南に移して対抗したことが描かれています。その3年後の478年に倭王武が宋に遣使したことを考えると、「中国を中心とした秩序のなかで朝鮮半島南部の軍事支配権を確保しようとしていた」ことの背景がみえてきますね。つまり、**勢力を強めつつある高句麗への対抗策として、倭は中国の力を背景に朝鮮半島南部への影響力を強めようとしていた**のです。

一方、資料文(4)の後半では、「この戦乱で多くの王族とともに百済の人々が倭に渡来した。さまざまな技術が渡来人によって伝えられ、ヤマト政権は彼らを部に組織した」とあります。つまり、**ヤマト政権は渡来人によってもたらされた大陸の進んだ技術を独占的に組織化することで、国内の豪族に対して優位な立場で国内の支配を進めていった**と考えられるのです。

以上、資料文(1)～(4)を確認しましたが、資料文(1)は対外的、(2)～(4)は国内的な内容が主であるとわかりました。その上でまとめると、5世紀後半のワカタケル大王の時代は、**対外的には高句麗との対立を背景として、中国を中心とした秩序のなかで朝鮮半島南部の軍事支配権を確保しようとしていた時代**であり、**国内的には関東から九州にいたる各地の豪族の支配を進め、その奉仕を受ける一方で、渡来人の技術を独占的に組織化し、「治天下ワカタケル大王」として中国皇帝とは異なる独自の立場から自らの支配権を主張していた時代**となります。そして、

資料文(1)にある「こののち推古朝の遣隋使まで中国への遣使は見られない」という一文をここで再度考えるならば、**ワカタケル大王の時代は推古朝(＝古代国家の成立)に至る古代国家成立の端緒となった時代**と考えることができます。なお、推古朝については東大2009年度[1]で問われていますので、是非参照してみてください。この「東大日本史のみかた」でも記念すべき第1回目の解答として掲載していますので、確認してみてくださいね。

【解答例】

ワカタケル大王の時代は、対外的には高句麗との対立を背景に中国を中心とした秩序のなかで朝鮮半島南部の軍事支配権を確保しようとしながらも、国内的には九州から関東にいたる各地の豪族の支配を進め、その奉仕を受ける一方で、渡来人の技術を独占的に組織化し、「治天下ワカタケル大王」として中国皇帝とは異なる独自の立場から自らの支配権を主張する、古代国家成立の端緒となった。(179字)

さて、みなさんの解答はいかがだったでしょうか？

論述問題の解答はもちろん一つではありませんので、「これはどうだろうか？」と自分では判断つかないものは必ず、添削してもらうことをお勧めします。**この『強者の戦略ホームページ』でもメールにて質問などを受け付けていますので、どしどし送ってくださいね。**

それでは、今回はこの辺にいたしましょう。次回「東大日本史のみかた」をお楽しみに！！